

地域居住者と他出者を中心にした地域活動

——「すまもり中世の田んぼクラブ」の事例——

齊 藤 綾 美

要 約

近年、人口減少などの課題を抱える農山村の地域活動を維持するうえで、他出者が果たす役割に注目が集まっている。本稿も出身地の地域活動にかかわる他出者に注目する。他出者が出身地の地域活動にかかわるうえでの課題は何か、地域居住者との関係を中心に検討する。具体的には青森県八戸市南郷島守地区しまもりにおいて、地域居住者と他出者を中心として組織された「すまもり中世の田んぼクラブ」（以下、「田んぼクラブ」と略称する）を事例とする。組織の設立経緯、組織構成、活動実態を整理しつつ地域居住者と他出者の関係性について検討したうえで、他出者が出身地の地域活動にかかわるうえでの課題を抽出する。そのさい、山梨県早川町茂倉地区の祭り組織と「田んぼクラブ」とを比較する。

「田んぼクラブ」には複数の課題がある。とくに、組織じたいが比較的新しく、水稻栽培を中心とする活動であるために、特定の地域居住者に負担が集中し、地域居住者とそれ以外の構成員との不協和音に結びついていることが最大の課題である。さらに、構成員に占める他出者の割合が少ないことも課題である。今後も「田んぼクラブ」が水稻栽培を中心とした活動を展開することを前提とするならば、農作業の負担の平準化と、地域内外への理解と支援の拡大が必要である。

キーワード：他出者 農山村 地域居住者

1. はじめに

近年、少子高齢化、人口減少、担い手不足といった課題を抱える農山村地域の地域活動を維持するうえで、「赤の他人」である都市住民以上に、他出者が地域社会で果たす役割の方が重要であるとの指摘がなされてきた（徳野 2008：63-64、大久保ほか 2011：6）⁽¹⁾。もちろん

八戸学院大学ビジネス学科

⁽¹⁾ たとえば、富山県大長谷村出身者青年会では、地域出身者であり、地域外に住む人びと（他出者）が青年会を結成し、田舎の遊びを子どもに体験させるほか、地域の運動会や祭りに参加したり、親の家の雪かきをサポートしたりするなど、村のサポーターの役割を果たしている（『季刊地域』2014）。

も、他出者が出身地域で形成した関係性や愛着、ローカルノレッジは、他地域出身者が持ちえない資源である。しかし、他出者による出身地域での地域活動にもまた課題がある。本稿では、地域居住者と他出者を中心として新たにはじまった地域活動を取りあげる。活動がなぜ、いかにはじまり、活動の実態がどのようなものなのか、地域居住者と他出者がいかにかわるかを整理したうえで、活動の課題および他出者が出身地の地域活動にかかわるさいの課題について整理する。

なお、本稿でいう他出者とは、大久保実香ら（2011：7）がいう「農山村で生まれ育ち、他所へ移住した農山村出身者」をさす。また、大

久保らと同様に「親が出身村に居住していない者も含む」こととする。大久保らによれば、先行研究のなかで、「農山村で生まれ育ち、他所へ移住した農山村出身者」はおもに二つの異なる対象として取り扱われてきたという。ひとつは「都市における農山村出身者」であり、もうひとつは「農山村にとっての農山村出身者」である。前者は「離村者」や「都市移住者」として表現され、「同郷関係」や「同郷会」との関連でとりあげられることが多かった。後者は「他出子」、「他出子弟」、「他出者」などとして表現されてきた（大久保ほか 2011: 7）。本稿ではとくに後者の意味合いでの他出者に焦点をあてる。

大久保ら（2011: 7）によれば、他出者にかんする研究は一定の蓄積があるものの、他出者とともにその地域活動の実態についての研究蓄積は十分ではないという。他出者である子どもが出身村に住む親にどのようにかかわっているか、という観点からの研究が中心になされてきた反面、他出者が出身村の地域社会や地域活動にどうかかわるのかについての研究は限定されている。さらに、それらの限られた先行研究のなかでも、他出者が出身村の地域社会に具体的にどのようにかかわっているのかについて明らかにした研究は少ないという。本稿では、地域居住者と他出者が、ひとつの活動になぜかかわりはじめ、具体的にどのようにかかわっているのか整理する。さらに、他出者と地域居住者の組織化の経験を積み重ねてきた山梨県早川町茂倉地区の祭り組織（大久保ほか 2011: 11-14）と比較しながら、地域居住者と他出者とがひとつの活動にかかわるうえでの課題を抽出する。すなわち、地域居住者と他出者が共同で地域活動を組織する経験が短いことに起因する課題に注目する。

以上の目的のもと、本稿は青森県八戸市南郷島守地区で活動する「すまもり中世の田んぼクラブ」を主たる対象とする⁽²⁾。「田んぼクラブ」

は、島守地区に居住する地域居住者と、島守地区出身者であるが現在は地区外に転出している「他出者」を中心的な構成員として、それ以外の構成員をもくわえて構成される任意団体である。出身村における他出者のかかわりについて扱った事例として大久保ら（2011）は、出身村の祭りや区総会、総人足のような地域の既存の活動やその延長線上にある活動に他出者がいかにかかわるかを整理している。それとは異なり、新たに団体を組織しかつ新規の活動をはじめた点に本事例の特徴がある。また、新しい活動であるがゆえの課題もみられる。

本稿では、「田んぼクラブ」の活動の分析をつうじて、地域居住者と他出者を中心として組織された、比較的新しい地域活動の現状と課題を明らかにする。この作業をとおして、他出者が出身地の地域活動にかかわるうえでの課題を示す。具体的には、地域の概要を解説したあとで、「田んぼクラブ」という地域居住者と他出者を中心に構成される組織の設立経緯と組織構成について整理する（3.1）。つづいて、「田んぼクラブ」の活動実態について述べる（3.2）。これらをふまえて、他出者と地域居住者の組織化の歴史が比較的長い茂倉地区の祭り組織と、比較的新しい組織である「田んぼクラブ」とを比較する。両者を比較することで、「田んぼクラブ」が直面する課題を示す（4）。もっとも、地域の伝統的な組織である若者組に起源をもつ茂倉地区の祭り組織と、設置後数年の「田んぼクラブ」とを単純に比較することに問題がないわけではない。しかし、第4節で検討するとおり、地域居住者と他出者が関与する組織という点では両者は共通しており、地域居住者と他出者の関係性について検討するひとつの視点となりえる。

本研究のデータ収集方法は以下に示すとおりである。まず、2015年4月から2016年11月まで「田んぼクラブ」の活動（田植え、稲刈り、収穫祭などの行事および、会合への出席）に参加し、参与観察をおこなった。また、同時期に

⁽²⁾ すまもりは、島守（しまもり）の中世の呼び名である。

主要な関係者を対象として、ヒヤリング調査を実施した⁽³⁾。

2. 地域の概要

鳥守地区は人口2,047人、世帯数758戸から成る、面積約9.1km²の地区である(2016年3月31日現在、八戸市ウェブサイト、中央大学民俗研究会1980:3)。鳥守地区の高齢化率は41.8%であり、八戸市の高齢化率(27.6%)と比べると高い(2016年4月30日現在、八戸市ウェブサイト)。鳥守地区は1957年まで一つの自治体(鳥守村)だったが、1957年に中沢村と合併し南郷村の一部となった。さらに、2005年に八戸市に編入合併した南郷村は「八戸市南郷区」に、2015年4月より同区は「八戸市南郷」に名称変更されている。

旧南郷村は1970年に過疎地域に指定されている。現在も旧南郷町を含む八戸市は、過疎法第33条第2項に基づく「過疎地域とみなされる区域のある市町村」である。鳥守地区を含む南郷では人口減少と少子高齢化がすすみ、それにもなって保育所や小中学校の統廃合がおこなわれてきた⁽⁴⁾。人口減少の現状は表1より明らかになる。表1は八戸市・南郷(村/区)・鳥守の1970年から2015年までの人口および世帯数の変化を示している。2015年の人口を1970年と比べると、八戸市においては1970年より13.1%増加しているのに対して、南郷は67.9%に、鳥守は56.6%に減少している⁽⁵⁾。

⁽³⁾ ただし、ヒヤリング調査が不可能な対象者(D氏)については、メールでのやりとりと調査票を用いたアンケート調査を実施した。

⁽⁴⁾ 2014年3月末には鳥守保育所が閉所し、2015年度末に市野沢・中野・鳩田小学校が閉校し、2016年度より南郷小学校が開校した。さらに、2017年3月末には八戸北高校南郷校舎が閉校した。また、ヒヤリングによれば、祭りなど地区の活動の一部が停滞しているという(C氏へのヒヤリング)。

⁽⁵⁾ ただし、八戸市の人口増加には2005年3月末の南郷村の編入も寄与している。

これらより、南郷のなかでも鳥守の人口減少が著しいことが明白である。

人口減少や少子高齢化という課題があるものの、鳥守地区は比較的豊かな資源に恵まれている。たとえば稲作・葉たばこ・果樹などを中心とする農業が盛んである⁽⁶⁾。また1998年には、農林水産省による田園空間博物館整備事業(1998～2005年度)の実施対象地区に鳥守地区が選定されている。さらに、2002年度に閉校した増田小中学校校舎を利用した「山の楽校」が2005年に設置され、地域居住者を講師とした蕎麦打ち、味噌や豆腐づくり、焼き畑などの体験教室が開催されている。さらに近年では、2011年より、鳥守地区を含む南郷全体をフィールドとした、八戸市による「南郷アートプロジェクト」がはじまっており、ダンス・パフォーマンスを中心とする新たな取り組みがおこなわれている。

3. 「田んぼクラブ」の組織構成と活動実態

3.1 「田んぼクラブ」の設立と組織構成

[設立の経緯]

第三節では、「田んぼクラブ」の設立の経緯、組織構成とネットワーク、活動実態について整理する。「田んぼクラブ」は、鳥守地区の「中世の田んぼの保存、活用を通じた地域の活性化に貢献することを目的とし」た団体(「すまもり中世の田んぼクラブの定メ」)であり、2014年1月に設立された。表2に示すとおり、クラブのリーダー(A氏)は鳥守地区外に居住する非鳥守出身者であるが、構成員のうち、活動の要となっているのが鳥守居住者や鳥守出身者であり、この意味で「田んぼクラブ」は、地域居住者と他出者を中心とした活動である(表2)。

⁽⁶⁾ 稲作については、たとえば野田地区では、1998年に国の「担い手育成基盤事業」により大区画水田が整備されると、1999年に営農組合が組織され、水稻の受託がすすんだ(「デーリー東北」2000年5月28日付)。

表1 調査地の人口と世帯数

年	人口(人)			世帯数(世帯)		
	八戸市	南郷	島守	八戸市	南郷	島守
1970	208,801	8,154	3,743	-	1,699	766
1995	294,167	6,704	2,989	104,783	1,767	736
2000	241,920	6,688	2,882	86,695	1,962	830
2005	244,700	6,272	2,536	90,308	1,904	731
2010	237,615	5,878	2,357	91,917	1,868	697
2015	236,084	5,540	2,080	106,957	2,188	759

出典：総務省(2012, 2014a, 2014b, 2016)より齊藤作成。ただし、次の文献も参照した。
 1970年の南郷の世帯数、島守の人口と世帯数については、中央大学民俗研究会(1980: 4-6)、2015年については八戸市ウェブサイトを参照(八戸市人口データ(平成27年度)、人口と世帯数一覧(地区別町内別)、10月)
 2015年については外国人人口・世帯を含む

表2 「田んぼクラブ」の構成員

構成員	役職	性別	年齢 ¹⁾	2014年度から参加 ²⁾	島守出身 ²⁾	島守在住 ²⁾	職業
A	村長	男性	60	○	×	×	元八戸市職員
B	指南役	男性	60	○	○	○	元八戸市職員、農業
C	指南役	男性	60	×	×	×	元島守小学校校長
D	事務局	女性	40	○	○	×	八戸市職員
E	-	女性	30	×	×	×	産直勤務
F	作業班	男性	30	○	○	○	米屋勤務
G	作業班	男性	40	○	○	○	大型ダンプ運転手
H	-	男性	40	○	○	×	ボイラー技士
I	-	男性	30	○	×	×	配送
J	-	男性	50	×	○	○	タクシー会社役員
K	賄い班	女性	40	○	○	○	和裁士
L	作業班	男性	30	○	○	○	営農組合オペレーター
M	作業班	男性	40	○	○	○	水道工事店勤務
N	作業班	男性	30	○	○	○	農業、元南郷区役所職員
O	作業班	男性	40	○	○	○	営農組合オペレーター
P	作業班	男性	30	○	○	○	会社員(詳細不明)
Q	賄い班	女性	30	○	○	×	歯科医院受付
R	作業班	男性	60	×	○	○	営農組合オペレーター
S	作業班	男性	40	○	○	○	建設業
T	作業班	男性	30	○	○	○	介護職
U	-	男性	40	○	×	○	アーティスト

出典：ヒヤリングより齊藤作成

- 1) 年齢は実際の年齢ではなく年代である。たとえば30は30代をさす
- 2) ○は該当者、×は非該当者をさす
- 3) 2016年6月現在

「田んぼクラブ」は2014年度から、田植えや稲刈りを中心とした地域活動をおこなっている。

活動の契機は、2013年7月に八戸市内で開催された歴史講演会をA氏（元八戸市職員）が聴講したことである⁽⁷⁾。講演会をつうじて、島守地区に重要な歴史的資源があることを認識したA氏が、資源を活かした活動の模索をはじめた。A氏が島守で活動をはじめた理由はおもに三つある。第一に歴史にかかわる実践をしたいという意図であり、第二にA氏が南郷で既に一定の人的ネットワークを構築しており、活動をはじめることが可能だったことである。第三は、島守の既存の資源活用である。第一の点についていえば、A氏の専門は歴史であり、市職員時代にも『八戸市史』の編纂など、歴史や文化財にかかわる仕事に長年携わってきた。また、旧南郷村の『南郷村誌』の歴史部門を担当したことがあった。歴史研究者としてA氏が歴史にかかわるうえで常々感じていた課題、すなわち、歴史講座とは異なるかたちで一般の人を対象に歴史の普及をはかりたい、という思いをもっていたことが理由のひとつである。

第二の点についていえば、A氏の市職員としての最後の仕事が「南郷アートプロジェクト」に関わるものであり、南郷や島守での人脈が既にある程度構築されていたからである。既存のネットワークが存在したことは、A氏が活動を開始する重要な要因となった。

これらにくわえて、第三に、島守地区には農林水産省の「田園空間博物館整備事業」によって整備された施設やその他の多くの歴史的資源があるものの、十分に活用されていないというA氏の認識もあった。資源の活用がもたら住民の手に委ねられる反面、地域内部の住民だけではそれらを十分活用しきれていない。交流人

口を増やし、地域外部の視点を地域に入れることで、資源のさらなる活用を図り地域の活性化にも結びつけたいという思惑もあった（A氏へのヒヤリング）。

A氏とその元部下のD氏が中心となり、構成員（村役人）の募集、地域住民への宣伝、構成員や地域住民をまじえた田んぼ見学会（2013年11月）⁽⁸⁾、構成員の会合などを経て組織を立ちあげ（2014年1月）、活動実施に至っている⁽⁹⁾。

〔組織構成とネットワーク〕

表2は「田んぼクラブ」の構成員の属性を示したものである。構成員は21人であり、うち17人が男性、4人が女性である（2016年6月現在）⁽¹⁰⁾。構成員の年齢は30代から60代までで、最も多い年齢層は30代と40代である。これらのうち、非島守出身者かつ非島守居住者が4人、他出者が3人（D氏、H氏、Q氏）、島守出身者かつ島守居住者が13人である。このほか、非島守出身者かつ島守居住者が1人いる（U氏）。なお、構成員のうち歴史に造詣が深いのはA氏のみである。他の構成員は歴史的な関心をもつ者ではなく、島守出身者・島守居住者やその友人である。

これらの構成員のほかに、田植え・稲刈り・収穫祭への参加者（「村人」）がいる。2014年・2016年の田植えや稲刈りへの「村人」の参加者はそれぞれ大人が約5人、子どもが約10人である⁽¹¹⁾。これらはおもに八戸市の居住者である（D氏へのヒヤリング）。

上述のとおり、A氏のアイデアをもとに、A氏がもつネットワークを利用して「田んぼクラブ」が組織された。そのネットワークは第一

⁽⁷⁾ 当時一関市博物館館長であり、東北大学名誉教授だった入間田宣夫氏が、調査に基づき八戸市島守地区に中世の水田跡が残るという講演をおこなった（「田んぼクラブ」内部資料）。関連する調査報告書として佐藤（2015）を参照のこと。

⁽⁸⁾ 田んぼ見学会の説明会が2013年10月に開催されている（「田んぼクラブ」内部資料）。

⁽⁹⁾ ただし、ヒヤリングによれば、初期の構成員すべてが、活動へのかかわり方を十分理解したうえで参加したのではないようである。

⁽¹⁰⁾ ただし、ヒヤリングによれば、活動にほとんど参加しない構成員も一部いるという。

⁽¹¹⁾ それぞれの行事には、構成員が約15人、構成員以外の協力者が数人～10人程度参加している（D氏へのヒヤリング）。

に、A氏の元職場にかかわるものである。鳥守のある地区の自治会長であるB氏と事務局を担うD氏はこの経路でリクルートされた。このネットワークは一部の「村民」のリクルート経路でもある。

第二に、A氏が南郷で築いてきたネットワークである。これは、鳥守に移住し「南郷アートプロジェクト」や中心商店街の活性化など八戸市内外でアート活動をおこなうアーティストのU氏、鳥守小学校の元校長であるC氏、「南郷アートプロジェクト」の企画で知り合った、L氏やR氏などの地元の消防団員などが含まれる⁽¹²⁾。さらに、L氏とR氏は鳥守の営農組合のオペレーターでもある。とくに活動の要である農作業を担うL氏については、その父親が鳥守にある営農組合の組合長だった。その結果、営農組合のネットワークを「田んぼクラブ」が利用できることになった⁽¹³⁾。なお、U氏とかかわりが強かったI氏もリクルートされた。もうひとつのネットワークは、鳥守出身者のネットワークである。D氏は八戸市職員であるが、鳥守出身の他出者でもある。D氏は鳥守出身者である同級生(H氏、他出者)や、D氏のきょうだいの同級生であるL氏、知人のK氏とP氏に声をかけた。先述のとおりL氏は消防団員でもあり、また地元の若い世代のリーダーであった。そのために、消防団員を中心とする地元の関係者にネットワークが広がった。また、D氏が南郷のボランティア・サークルにかかわっていたことから、このサークルに所属していたH氏とK氏も構成員にくわわった。

なお、構成員ではないものの、一部の構成員の妻がイベントの支援をしている。すなわち、鳥守出身者かつ鳥守在住者の構成員の一部にお

いては、構成員の妻が、行事で参加者に提供する昼食準備に携わっている(N氏、T氏、K氏へのヒヤリング)。

3.2 活動実態

つぎに活動実態について解説する。「田んぼクラブ」の活動の中心は農作業、ことに、田植え・稲刈り・収穫祭である。たとえば、2014年度および2015年度には、構成員のほかに行事ごとに作業にかかわる参加者(「村民」)を募り、両者が協力して半日程度の田植え(5月)、草取り(6～8月に複数回)⁽¹⁴⁾、稲刈り(9～10月)、脱穀(10月)をするほか、11月には収穫祭をおこなった⁽¹⁵⁾。収穫祭では収穫した米の一部(年間一人あたり数キロ)が参加者に提供される。これらのほかに、2015年度には、田んぼの歴史的価値についての理解をはかる「すまもり村の勉強会」も開催されている(11月)。

とはいえ、水稻栽培と行事を実施するうえで、構成員の会合、イベント前後の準備、イベント以外の農作業もおこなわれている。たとえば2014年度には、構成員対象の会合が少なくとも9回開催され、イベント前の準備が少なくとも7回おこなわれている(「すまもり村」内部資料)。このほか、一部の構成員が水管理や施肥、その他水田・水稻の管理を日常的に担っている。

構成員にも役割分担があり、会を中心的に運営するリーダー(地域外出身者かつ地域外居住者)・事務局(他出者)と、農作業を中心に担う男性の「作業班」(鳥守出身者かつ地域居住者)、行事の昼食準備と片付けをする女性の「賄い班」(「作業班」の配偶者、地域居住者、他出者)、それ以外の構成員に分かれている。問題は、鳥守出身者かつ地域居住者の男性の多くが、農業経験も豊富で住居が水田に近いとい

⁽¹²⁾ なお、消防団員の多くが地元のソフトバレーボール・チームのメンバーでもあるという(K氏へのヒヤリング)。

⁽¹³⁾ 「田んぼクラブ」の収穫祭を営農組合の収穫祭と合同開催したり、イベント時のゲーム景品の一部を営農組合が提供したり、営農組合の備品の借用などが可能になった。

⁽¹⁴⁾ 2016年も前年とほぼ同様の内容を踏襲したが、農作業を担う構成員の負担軽減という観点から除草剤を使用し、草取りを廃止した。

⁽¹⁵⁾ ただし、2016年度より参加費にかんする方針を変更した。行事ごとではなく、年度単位で参加者から費用を徴収する方式に改めた。

う理由で「作業班」として活動し、その一部に多くの負担がかかることである。他出者やリーダー（A氏）は農業経験がそれほど豊富でないうえ、市内とはいえ鳥守から離れた地域に居住するために、日々の農作業を単独で担うことができない。

こうしたことを一因として、活動2年目頃から組織内部で不協和音が響きはじめた。最大の理由は、上述のとおり、水稻栽培には日々の農作業、すなわち水管理、除草と施肥などが必要なことである。「村民」が参加する主たるイベントは、田植え、稲刈り、収穫祭の3つであり、あいだに除草、脱穀が入る。それ以外の農作業（播種と育苗、耕起、水田の水漏れ箇所の確認と補修、代掻き、畔草刈、水管理、除草と施肥、害虫駆除等）は構成員が担っている。ただし、これらのうち機械や農薬を使う作業は、水田の管理を自らおこなった経験のある者にしか担えない。鳥守居住者や鳥守出身の構成員のなかには農作業の経験はあるものの、これらの作業を単独で担う知識がない者もいる。よって、水稻栽培の知識と経験をもち、かつ地域内に住む特定の鳥守居住者の構成員に負担がかかることになる。「田んぼクラブ」の農作業は毎年おこなわれるため、作業担当者の負担は大きい。しかも、作業担当者それぞれが就労しており、時間的な制約もある。「田んぼクラブ」の農作業の中核を担う営農組合のオペレーターにとっても、田植えや稲刈りなどの繁忙期に、たとえ面積はわずかとはいえ、「田んぼクラブ」の水田の管理をボランティアで担うことは大きな負担になっている。

また、他出者である事務局の作業量が多く、担当者の負担にもなっている。さらに、今後の活動の新たな展開が見いだせないために、一部の構成員からは、米づくり以外の活動の展開がないことへの反発の声もあがっている。こうして、構成員以外の参加者（「村民」）が鳥守地区の素晴らしさや農作業の楽しさを感じる一方で、活動の準備作業や農作業を担う構成員の負

担感が増している。

4. 組織の課題——茂倉地区の祭り組織との対比

ここで、比較に問題があることを認識しつつも、茂倉地区の祭り組織と「田んぼクラブ」とを対比し、組織の共通点と相違点をあげる。とくに相違点に由来する、「田んぼクラブ」の課題を抽出する。まず、両者の共通点である。表3は茂倉地区の祭り組織と「田んぼクラブ」を比較したものである。第一に、両者はともに、地域居住者と他出者の協力関係のもとで組織化された。したがって、地域居住者の支援がなければ、活動を実施することができない。他の行事やイベントと日程が重複するために組織のイベントや準備作業に参加できず、他出者が地域居住者にたいして後ろめたさを感じている点も共通している⁽¹⁶⁾。第二に、両組織はいずれも年数回、イベントを開催する組織である。ただし、第二の点については後述のとおり大きな相違もある。

相違点には次のものがある。第一に組織の歴史である。両者はともに2000年以降に組織化がされた。すなわち、茂倉祭りの母体は2006年に、「田んぼクラブ」は2014年に組織された。ただし、茂倉の祭り組織には「茂倉若者保存会」という前身があり、さらにその前身として「若者組」があった。こうしてみると、茂倉の祭り組織は戦前からの歴史をもっており、地域の伝統的な既存組織の系譜を継いでいる。反面、「田んぼクラブ」はそうした伝統がないところで生まれた、新しいボランティア・アソシエーションである。そのために「田んぼクラブ」における地域居住者と他出者の役割分担は、定着したのではなく、構成員からの不満が出やすいと

⁽¹⁶⁾ 鳥守居住者に農作業の負担を強いていることや、仕事の都合で作業に参加できないことへの負い目を感じる、という声が「田んぼクラブ」のある他出者からは聞かれた。

表3 茂倉の祭り組織と「田んぼクラブ」

	茂倉祭り組織	「田んぼクラブ」
役員全体に対する 他出者の割合	3/6 ¹⁾	3/21 ²⁾
活動開始年	2006	2014
組織設立理由	「若者組」の後身組織の解散	会長（地域外出者）の意向
活動目的	春祭, 夏祭の実施	「中世の田んぼ」を活かした地域活性化
組織の性格	「若者組」の後身 (区会(地域居住者) + 氏子総代(他出者))	ボランティア・アソシエーション (地域居住者 + 他出者 + 他)
他出者の役割	氏子総代 ¹⁾ (イベントの準備・運営・片づけ)	構成員 (イベントの準備・運営・片づけ, 会合, 農作業)
活動頻度	年2回(春祭・夏祭)のイベント (+準備作業)	年3回(田植え・稲刈り・祭り) のイベント(+準備作業, 会合, 農作業)

出典：大久保ら（2011）およびヒヤリングより齊藤作成

1) 2009年現在

2) 2016年6月現在

考えられる。これに関連して、「田んぼクラブ」が実施するイベントは地域の既存の行事ではないために、町内会などの地域組織からの費用負担が定着しておらず、結果として運営の厳しさにつながっている。

第二に、茂倉地区の祭り組織では、構成員にたいする他出者の割合が50.0%であるのにたいして、「田んぼクラブ」のその割合は14.3%である。2009年の茂倉地区の祭り組織の役員は、地域居住者3人と他出者3人である。「田んぼクラブ」の構成員は、地域居住者14人と他出者3人、その他4人である。さらに、茂倉地区では祭り以外にも、他出者が区費を納入し、区総会や総人足などの地域行事にかかわる経験を1970年代頃から積み重ねてきた（大久保ほか2011：10-11）。したがって、祭りにおいても、役員以外の他出者も準備作業に参加する。たとえば、2009年の夏祭りでは、祭り当日の準備作業に他出者である役員3人とその他他出者（18人）が地域居住者ととともに参加した（大久保ほか2011：13）。茂倉では、祭り組織だけでなく区の組織じたいも地域居住者と他出者との協力を前提として組織化されている。その経験の長さが茂倉と鳥守とでは大きく異なり、イ

ベントに関与する他出者の割合に反映されているものと考えられる。

第三に、両者はいずれも年数回のイベントを実施するが、相撲大会や神輿をおこなう茂倉地区とは異なり、「田んぼクラブ」は農作業を中心としたイベントを実施する。先述のとおり水稲栽培には日常的な管理が必要であり、イベント当日および直前の準備作業以外の作業が不可欠である。よって、構成員とくに地域居住者の負担が重くなっている。

こうしてみると、両組織は地域居住者と他出者を中心に組織化されているという点では同一であるが、大きな違いもある。それは「田んぼクラブ」が地域の伝統的な組織の流れを汲まない、新しい組織であることである。また、鳥守地区には地域居住者と他出者の協力関係のもとで地域活動を組織する経験が蓄積されていない。くわえて、農作業を中心とした活動内容であるがゆえに、「田んぼクラブ」は特有の課題に直面しているといえる。

5. おわりに

本稿では、鳥守地区で地域居住者と他出者を

中心に組織された「田んぼクラブ」を事例として、他出者が出身地の地域活動にいかにかかわり、そのさいの課題について検討してきた。検討にあたって、鳥守同様に地域居住者と他出者によって組織される茂倉地区の祭り組織と比較をすることで、「田んぼクラブ」の特徴を明らかにした。

その結果、「田んぼクラブ」が比較的新しいボランティア・アソシエーションであること、地域居住者と他出者の協力の経験が短いがための課題を抱えていることが明らかになった。すなわち、「田んぼクラブ」は設立後数年の比較的新しい組織であり、かつ地域の伝統的な組織の系譜を継ぐものでもない。よって、他出者と地域居住者の役割分担が必ずしも固定的なもの、所与のものとして認識されておらず、構成員からの不満が出やすいと推測される。それだけでなく、特定の地域居住者にたいして農作業の負担が集中したことで、地域居住者とそれ以外の構成員との関係に影を落とすことになった。

さらに、茂倉地区では比較的多くの他出者が祭り以外の区会行事に参加することが1970年代頃から定着しているが、鳥守ではそのような実態が「田んぼクラブ」以外ではほとんどみられない。よって、他出者の出身地の地域活動への参加が定着しておらず⁽¹⁷⁾、「田んぼクラブ」の構成員に占める他出者の割合が少ない。構成員に他出者が少ないことも同組織の課題である。

「田んぼクラブ」が水稻栽培を中心とした活動を継続することを前提とするならば、課題への対処方法として、第一に、農作業の負担を平準化する必要がある。特定の地域居住者に偏らない作業分担にしたり、より多くの地域居住者や他出者を巻き込んだり、地域外居住者や参加者(村人)に一部負担を負わせるなどの方法が

考えられる。第一の点と重なるが、第二に、地域内外の理解者・協力者を増やし、労働力、アイデア、資金などの支援を得ることである。組織を取りまく条件や地域の歴史が異なるため、茂倉地区の祭り組織のような支援が即座に得られるとは考えにくい⁽¹⁸⁾が、より広範に活動をアピールし、理解と支援を求めることは重要である。

「田んぼクラブ」は以上のような課題を抱えている。とはいえ、地域居住者と他出者を中心としてボランティア・アソシエーションを組織化し、地域内外の資源を活用する活動には一定の意義がある。「田んぼクラブ」の活動参加者の関係性の変化と活動の今後の展開、地域内外の諸組織との連携についてさらに調査を継続することが必要である。

謝辞：本研究のために、「田んぼクラブ」の構成員の方々にお世話になった。ここに記して御礼申し上げたい。

文 献

- 鯉坂学・湯浅俊郎・星真理子・吉原千賀・杉本久末子, 2001, 「都市一農村関係と都市移住者——石川県小松市出身者を中心として」『同志社社会学研究』5: 1-68。
- 中央大学民俗研究会編, 1980, 『常民』17, 中央大学民俗研究会。
- 「デーリー東北」2000年5月28日付。
- 八戸市ウェブサイト「八戸市人口データ(平成27年度), 人口と世帯数一覧(地区別町内別), 10月」, <http://www.city.hachinohe.aomori.jp/index.cfm/8,85851,35,463.html>, 2016年11月27日閲覧。
- 八戸市ウェブサイト「八戸市人口データ(平成28年度), 町内毎年令人口分布表」, <http://www.city.hachinohe.aomori.jp/index.cfm/8,94931,c.html/94931/20160509-202333.xls>, 2016年5月27日閲覧。
- 『季刊地域』2014, 「大長谷出身者青年会がやっていること」, 16: 75。

⁽¹⁷⁾ ただし、鳥守においても過去には祭りに他出者数名が関わることがあったという。

- 大久保実香, 2013, 「限界集落とローカルコミュニティ——管理主体の一員としての他出者の役割」『森林環境 2013』, 53-64。
- 大久保実香・田中 求・井上 真, 2011, 「祭りを通してみた他出者と出身村とのかかわりの変容——山梨県早川村茂倉集落の場合」『村落社会研究ジャーナル』17 (2) : 6-17。
- 佐藤健治, 2015, 「中世島守の水田現地比定」『環境動態を視点とした地域社会と集落形成に関する総合的研究——平成 26 年度研究成果報告書』東北芸術工科大学東北文化研究センター 41-47。
- 総務省統計局, 2016, 「平成 7 年国勢調査, 小地域集計, 02 青森県, 第 2 表 男女別人口及び世帯数 - 町丁・字等」, <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL02020101.do?method=extendTclass&refTarget=toukeihyo&listFormat=hierarchy&statCode=00200521&tstatCode=000001064072&tclass1=000001064137&tclass2=000001064139&tclass3=&tclass4=&tclass5=>, 2016 年 12 月 24 日閲覧。
- , 2014a, 「平成 17 年国勢調査, 小地域集計, 02 青森県, 第 2 表 男女別人口及び世帯数 - 町丁・字等」, http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL0802103.do?_toGL0802103_&tclassID=000001053610&cycleCode=0&requestSender=search, 2016 年 12 月 24 日閲覧。
- , 2014b, 「平成 12 年国勢調査, 小地域集計, 02 青森県, 第 2 表 男女別人口及び世帯数 - 町丁・字等」, <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List/do?bid=000001053213&cycloCode=0>, 2016 年 12 月 24 日閲覧。
- , 2012, 「平成 22 年国勢調査, 小地域集計, 02 青森県, 第 2 表 男女別人口及び世帯数 - 町丁・字等」, http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL0802103.do?_toGL0802103_&tclassID=000001036531&cycleCode=0&requestSender=search, 2016 年 12 月 24 日閲覧。
- 徳野貞雄, 2008, 「農山村振興における都市農村交流, グリーン・ツーリズムの限界と可能性——政策と実態の狭間で」『農村社会研究』43 : 43-93。
- [ヒヤリング]
- A 氏 : 2015 年 12 月 15 日
八戸市まちづくり文化推進室関係者 : 2015 年 4 月 5 日
V 氏 (「田んぼクラブ」参加者) : 2015 年 4 月 27 日
U 氏 : 2015 年 6 月 6 日
C 氏 : 2015 年 6 月 15 日
D 氏 : 調査票調査による (2016 年 7 月 4 日回収)
H 氏 : 2016 年 7 月 9 日
L 氏 : 2016 年 7 月 10 日
K 氏 : 2016 年 11 月 5 日